

学位論文題目：室町期少弐氏・宗氏の朝鮮通交

氏名 伊東亜希子

本論文は、14 世紀末から 15 世紀前半の時期に行われた日本の諸勢力と朝鮮との間の外交（以下、朝鮮通交と称す）について、少弐氏と宗氏を中心に据えて論じようとするものである。

第一章では、応永 4 年（1397）からの外交交渉を経て応永 6 年 5 月までに開始された幕府の朝鮮通交に着目し、そこでの宗氏の役割について検討した。幕府による朝鮮通交の開始にあたっては、周防・長門国守護で朝鮮半島に出自を持つと主張する大内氏の協力があったと考えられている。しかし、このときの朝鮮通交の実務の一端を宗氏も担っており、大内氏の協力のみ限定する推測は再検討が必要であろう。この点について本章では、「御判物控」（5 月 7 日宗貞茂書状）の年次比定を改めて行うことにより、大内氏ではなく宗氏が幕府と結びついて被虜人（倭寇によって日本に連れ去られてきた人々）の送還を行ったことを明らかにし、それを契機として幕府による朝鮮通交が開始されたと推測した。

第二章では、上述の幕府による朝鮮通交において、大内氏が起用されなかった理由の検討を行った。本章では、軍記物ながら内容については、当時の世相を反映しているとされる『応永記』から、当時の大内氏が置かれた状況を検討した。その結果、大内氏当主の義弘は、応永 4 年に自身が行った少弐氏征伐の頃から自らも足利義満に征伐されるのではとの疑念を抱いており、それが応永 6 年末の応永の乱に繋がった、それゆえ、幕府による朝鮮通交が開始された応永 6 年 5 月の時点にはすでに室町殿足利義満と大内義弘の間には不和が生じており、被虜人の送還に大内氏を起用することが出来なかったのではないかと推測した。

第三章と第四章は、宗氏による朝鮮通交と、幕府側の大内氏や、宗氏の主家にあたる少弐氏の朝鮮通交を比較し、朝鮮通交における三勢力それぞれの立場と関係を検討した。

まず第三章では、少弐氏の朝鮮通交がどのように行われていたのか、そしてそれを可能としたものは何であったのかについて検討を行った。具体的には、通交を希望した者に朝鮮から下賜される回賜品の中身の変化に注目した。少弐氏の応永 9 年（1402）～応永 31 年にかけての通交における回賜品は、経や梵鐘等の文化的なものもみられた。しかし、幕府と対立している応永 32 年～永享 3 年（1431）の期間に行われた通交での回賜品は、米や布など戦闘に直接必要とされる食料や物品であった。しかもそれは、幕府と対立している時期であっても、さも対立していないかのように朝鮮に対して示し、朝鮮からの軍需物資の獲得を図っていた。そのことは、少弐氏が幕府と対立している時期に朝鮮へ送った使者が室町殿のことを「我殿下」と呼んでいることから推測を行った。そこまで少弐氏がしたこと背景には、幕府と対立し、本拠地である筑前国を追われて困窮している少弐氏にとって、どのような手段を講じても通交（軍需物資獲得）を達成することが、目の前の戦闘を戦い抜くために必要であったからであると考えた。14 世紀末から 15 世紀前半においては、九州をはじめとする西国の様々な勢力が朝鮮通交を行ったとされるが、その実態や通交の動機は、国内の政治的・軍事的動向によって左右されていたと考えられる。

第四章では、朝鮮通交における「同時通交者」に注目した。「同時通交者」とは、『朝鮮王朝実録』において、同日に使者を派遣してきたと記された日本国内の勢力のことである。特に少弐氏の同時通交者を、宗氏の政治的動向により区分し、特徴を析出することを試みた。その結果、以下のことが判明した。すなわち、少弐氏は宗氏の朝鮮通交に便乗する形で自らも応永 9 年に通交に参画した。少弐氏の応永 19 年～応永 21 年の通交においては、宗家当主の通交に便乗することが朝鮮に請求した物資を確実に得られると少弐氏は考えており、宗氏もこれと同様に考えていたと推測した。

その後、応永 30 年～永享 2 年（1430）における少弐氏は、宗家当主に限らず、宗氏一族や対馬住人である早田氏とも一緒に通交を行っていた。一方、応永 19 年～応永 21 年の時期と比べて、少弐氏が宗家当主とともに通交を行うことが少なくなるが、世宗 8 年（1426）の文引制度の開始以後、宗氏による朝鮮通交の統制が強化されると、少弐氏は宗氏の主人である立場を利用して、要所では宗氏とともに通交することにより朝鮮からの物資獲得に成功していた。これは、南北朝時代からの両氏の主従関係が解消されることなく、15 世紀前半にも継続していたからであったと推測した。

終章では、これまで述べてきたことをまとめ、14 世紀末から 15 世紀初頭にかけての少弐氏や宗氏の通交の特徴と、彼らの朝鮮通交に室町幕府や大内氏がどのように関係していたのかについても展望を交えながら述べ、最後に今後の課題を示した。